
後期高齢関節リウマチ患者では臨床的疾患活動性と関節エコー所見は乖離しうる

斯波 秀行, 永井 孝治, 佐野 友紀, 小田 勝大, 山本 直宗, 佐伯 彰夫, 杉野 正一
(恒昭会 藍野病院 内科)

【目的】高齢の関節リウマチ（RA）患者を診察する際、臨床的評価による病勢の過大評価をよく経験する。その一方で関節エコーを用いた RA の疾患活動性評価は臨床的評価より有用であるとの報告が近年多くなされてきている。そこで高齢 RA 患者の診療における関節エコーの有用性を検討すべく当院の患者データを解析した。

【対象・方法】2017年10月までに当院で関節エコーを施行した RA 患者 37 症例・48 回分を 75 歳未満の群（非後期高齢者群）と 75 歳以上の群（後期高齢者群）に分け、臨床的評価（DAS28CRP, CDAI, SDAI）と関節エコーによる疾患活動性評価（総 GS 値, 総 PD 値）との相関関係を統計学的に検討した。

【結果】非後期高齢者群では臨床的評価と関節エコーによる疾患活動性評価との間に有意な相関関係を認めた。しかし後期高齢者群では有意な相関関係を認めなかった。

【考察】非後期高齢 RA 患者では臨床的評価と関節エコーによる疾患活動性評価は相関するため病勢評価を目的としたエコー検査の意義は高くなく、臨床的評価に基づいて治療調節を図ることは妥当だと考えられた。しかし後期高齢 RA 患者では臨床的評価と関節エコーによる疾患活動性評価が乖離する可能性があるため、臨床的評価が病勢と合致しないと思われる場合は積極的に関節エコー検査を施行し、関節エコーによる疾患活動性評価に基づいて治療調節を図ることが妥当だと考えられた。